多様な見方や価値観にふれる授業づくり

京都先端科学大学附属中学校高等学校
司書教諭〈国語科〉
日本新聞協会 NIE アドバイザー
伊吹　侑希子

いまの子どもたちは、物心がついた頃からネットを通じて日々たくさんの情報に触れています。一方で、興味関心のある事柄ばかりを検索しているうちに、自身と似通った考え方・価値観の情報ばかりをみているというエコーチェンバーに陥る危険性もはらんでいます。

2020 年から小学校より年次進行で実施された学習指導要領で身につける力として挙げられている「学びに向かう力・人間性等」の中では、多様性を理解して仲間と協力する力など、豊かな人間性の資質を伸ばすことに重きが置かれています。「多様性」とは、さまざまな存在や考え方が共存し、認められている状態を指します。新課程の現代文の教材においても、生物の多様性を論じた文章のほか、文化やジェンダーなど社会的な多様性について述べた文章が多く掲載されるようになりました。とりわけ、ジェンダーに関して「性の多様性」について、中学では国語・歴史・公民・家庭・美術・保健体育・道徳の教科書で、高校では公共・家庭基礎・保健体育の教科書で記述が増えました。複数の教科での学習が関連付けられることで、生徒の学びを深めることに繋がっています。

本実践では、高校一年の必修科目「現代の国語」の授業で、国谷裕子さんの『ポスト真実時代のジャーナリズム』を教材に読解をしました。多様な見方に気付くことをねらいとした発展学習では、生徒が「じぶんごと」として捉えやすく、賛否両論の話題が多いジェンダーをテーマに設定しました。京都新聞の特集記事「Our Voices―性を考える」で取り上げられた男女格差や男女の呼称の違いなど、生徒に身近な話題を手掛かりに、全国紙など他紙の新聞記事データベースを用いて関連する記事を探し、新聞社によって報道や視点の違いなどを比較し、ジェンダーにまつわる課題について話し合いました。あるグループでは男性版育休のあり方について、高校一年生の視点でありながら、職場の同僚や乳幼児をもつ家族など、それぞれの立場を推し量り、どのような制度が理想なのか、議論が白熱しました。その他、女子の理系学部への進学格差など、生徒たちが知らなかった過去の出来事から、なぜそのような問題が起こったのか、その認識は現在改められているのか、問題視された政治家の発言などにも言及しながら、自分たちの世代がどのように社会を変えていけるのか、意見を出し合っていました。

この授業を受けてさらなる発展的な学びとして、社会科の教員 2 名にも加わっていただき、ジェンダーにまつわる発言について考える教科横断型の授業を展開しました。生徒同士だけでも視点や考え方の違いがありますが、世代によっても捉え方が異なるため、生徒が多様な視点を持てるように工夫しました。新聞を授業に取り入れたことで、生徒たちが知らなかった社会をひらくツールとなりました。この学習活動での対話を通じて、自分の考えを伝えるだけでなく、他者の意見をやりとりする中で、多様な見方や価値観に触れて互いの学びを深められました。